

# 運転免許更新に行つて

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

誕生日に際して自動車運転免許の更新を行った。東京都における運転免許試験場の代名詞でもある「鮫洲」である。

そこで18歳で運転免許を取得して以来、61歳となった現在まで、免許停止の反則講習会、国際免許取得も含め、いったい何回、その場に向かったのかは数えていないが、今回は周辺景色が変わってきたことに気付かされた。

まずは現在まで、何の疑問も無く、試験場の門をくぐる前の立ち寄り場所と認識していた、門前の代書屋が、完全に無くなっていたことに驚かされた。

昔から代書屋を介するのは決して義務では無かった。免許更新自体は、その気になれば、試験場内に入り自力で出来る作業ではあったが、実に便利が存在であった。よって自身に限らず、大概の人々も自然に足を向けていたように思う。

中に入ると申請用紙が配られ、申請の顔写真を撮ってもらい、必要内容をワープロやタイプライターで申請書類に記入してもらい、完璧な書類を持って、免許センターの視力検査の列に並ぶという流れであった。

そして法曹資格である行政書士の開業場であったが、殺風景な内装内で、感じが良い訳でも悪い訳でもない従業

員が淡々と「流れ作業」をこなしていたものと記憶している。

もちろん、無料で、それらのサービス授受が成立していたわけでは無く、毎回、それなりの料金を支払っていたが、特別に高くも安くもなかったであろう。

よって正確な定価も、得した感も損した感も記憶に残っていない。まさに適正価格であったことに違いない。

今思えば、極めて効率的な商売であったように思えるが、あの頃の業者は、いったい何処に行つてしまったのであろう。

そこで何が変わつたのか、はつきりと羅列できないが、試験場内が明るく、導線が分かりやすく、IT化で簡易に運転免許の更新が出来るようになったことは確かだ。

システムがスムーズになると、働く人々も変わるであろう。誰もが、ニコニコしながら、はつらつと任務に徹している。

食堂も綺麗で、美味しい「役所めし」としてグルメ雑誌に掲載されたと聞く。1月生まれの小生が鮫洲に行くのは、必ず真冬であるが、いつの間にか、お役所の典型である運転免許試験場も、うら寂しい雰囲気は払拭されていたのだ。

現在、厚生労働省の統計情報の真意が問われ不正が追及されているところだが、公的サービスが本気を出せば凄いのではと気付かされた月であった。

石油ストープが似合っていた代書屋と、無愛想で無機質であった試験場の景色は、昭和と平成の想い出に残して置きつつ…。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

